

## 東北の新玄関口・丹東

2011.9.30

香港 花木

### (1) 丹東市

丹東市は遼寧省の南部にある人口約 270 万人の中規模都市で、黄海の湾奥に位置する。長白山に源を發する鴨緑江の河口都市であり、左岸にある新義州（北朝鮮）の対岸にあり、かつては安東と呼ばれていた。満州国時代には、満州国の入り口として日本資本による街づくりが進められ、東洋紡や王子製紙の工場が建設されたほか、今日でも中朝間の貿易の約 4 分の 3 はここ丹東から新義州につながるルートを経由しているとされる地政学上の要に位置している。



← 丹東市（赤印）

前回 7 月に吉林省の琿春を訪問した際には、町じゅうに韓国語（ハングル）・ロシア語（キリル）の看板があふれていたが、丹東ではハングルの看板はそれほど目につかず、一見中国の他の都市とあまり変わらない印象を受けた。むしろ、低く丸みを帯びた緑豊かな山々や、黄色く実った稲穂の波がつながる平野の姿は日本の都市を思い起こさせる。

丹東市の中心は鴨緑江に面した地域であり、そこから北朝鮮に向かって中朝友誼大橋（鉄道・車両共用橋）と、かつて日本が建設し、朝鮮戦争中に国連軍の爆撃によって途中で破壊された「断橋」の 2 本の橋が伸びている。この辺りは河口に近い地域ということもあり、対岸の北朝鮮第二の都市・新義州までは約 1km もの距離がある。

国境の町ということで最初、緊張した雰囲気を用意して訪問してみたものの、実際に訪問してみると、ちょうど夏が去ったばかりという過ごしやすい季節であったこともあり、鴨緑江沿いの公園はウェディングドレスを着て記念撮影に興じるカップルと、各地からやってきた中国人観光客でにぎわっていた。河沿いには中国のどこの都市もそうであるよう

に高層マンションが林立し、道路沿いではみやげ物屋や写真館が大音量のスピーカーで客寄せを行っている。また、鴨緑江沿いには北朝鮮の国境近くまで行く遊覧船が就航し、これも大音量で客寄せを行っていた。

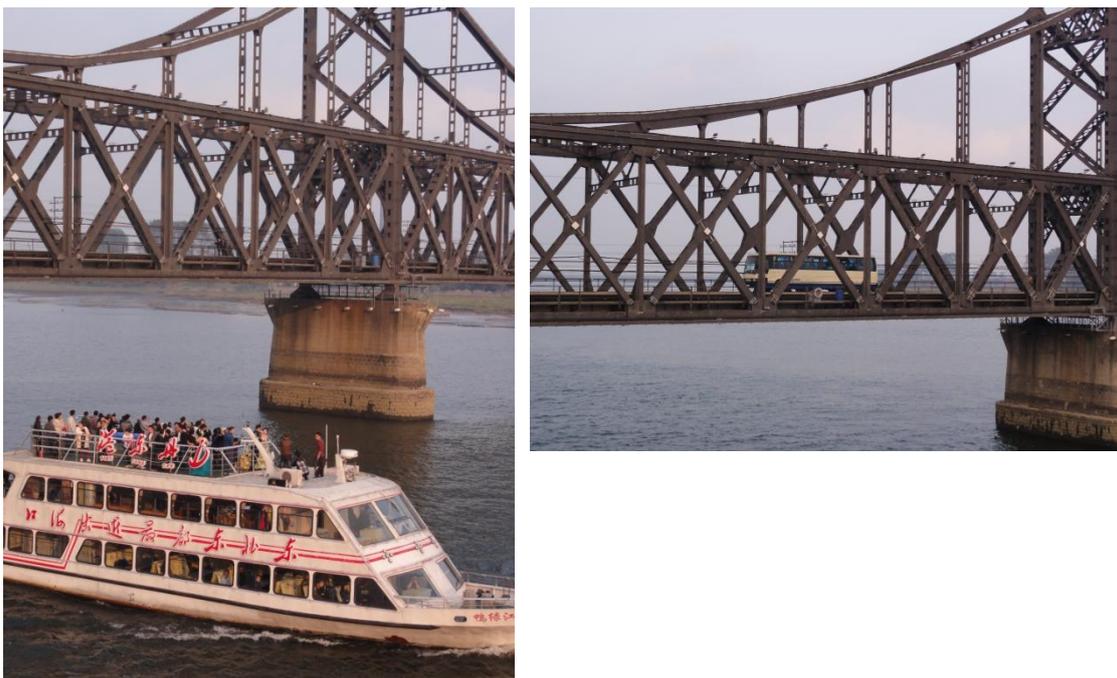


↑ 鴨緑江沿いの丹東市街地。棧橋の船は北朝鮮国境遊覧船である。



↑ 国境の町というより観光の町と言ったほうが適切そうだ。後方は中朝友誼大橋。

実際、中国国民を対象とした北朝鮮日帰りツアーはかなりの人気で、訪問した日は日曜だったせいか、夕方になると中朝友誼大橋を何台もの観光バスが戻ってくる光景に出くわした。観光業者によれば、北朝鮮ツアーは新義州周辺を回る日帰りと、首都平壤まで足を延ばす3日ツアーがあり、日帰りでも料金は780元と高額である。(中国では同様のツアーの相場はだいたい150元程度。) また、ツアー参加に当たっては、4日前に申請し、前日に集合して「首実検」を受ける必要がある等手続きもめんどろだが、それにもかかわらず中国人の北朝鮮旅行は相当繁盛しているようだった。



↑ 屋上まで満員の国境沿い遊覧船（左）と、北朝鮮から戻ってくる観光バス（右）

## (2) 開発区

丹東市は、つい6年前の2005年に大連と結ぶ高速道路が開通するまでは、大連からも瀋陽からも約8~9時間を要する陸の孤島であった。しかし、今では片側2車線の快適な高速道路を経由するバスが30分毎に市中心のターミナルを発車し、約3時間で大連・瀋陽との間を結んでいる。2年後の2013年には高速鉄道が開業し、大連まで約1時間、瀋陽までは約45分の時間距離となるほか、丹東から更に北上して東北三省の東部を結ぶ延長約1,400kmの東北東部鉄道が完成すれば、第二の満鉄線として満州各地の物産がここ丹東の港に集まるようになるものと見込まれる。

丹東市でもこうした発展を見越して、黄海に面した東港市に大規模な埠頭を造成中であるほか、丹東~東港につながる鴨緑江右岸の約30kmにわたる地域に、100平方km以上の大規模な産業開発区・丹東臨港産業園区を設置し、韓国系企業をはじめとする外資企業の進出を積極的に図っている。



↑ 産業園區の模型。左側の川は鴨緑江。既に韓国 SK グループ等が進出している。

### (3) まとめ

今回、丹東市を見てみたが、その将来はかなり有望と思われた。何よりもその交通インフラの充実が目を見張るにたるものであり、特に東北東部鉄道開通後は、東北三省の資源・物資流通では大連に次ぐ要の位置を狙うものと思われる。(既に進出している韓国 SK 集団も、主に物流機能に関する投資を行っているようで、同じ読みがあるものと思われた。)

一方、この地域で留意すべきは人材問題であろう。東北地方全体が華南や華東のように大規模な出稼ぎ流入地でないほか、最近では東北地方から山東省等に向けた出稼ぎが増えており、丹東への出稼ぎ者の流入はボリューム的に少ないように見受けられた。実際、当地で訪問した某企業経営者もこの点を指摘し、「一方で人が集まりにくいというマイナスはあるものの、他方で流入人口が少ないということは地域の落ち着きを高め、人間どうしが信頼できる環境を作り出している」と指摘していたが興味深い指摘といえよう。

最後に、この地域は東北三省の中でも特に満州国経営時代に経営の重点が置かれた都市として、日本に対する比較的よい感情を持ってきている地域のように見受けられた。戦

後の波乱の歴史の中で、満州→国民党中国→共産党中国とその支配者を代え、かつ、朝鮮戦争の最前線として多大な被害を受けた地域においてこうした感情があるということは得難いソフト価値があると言えよう。戦前を知る世代がほぼ引退した今であるが、まだこうした人たちが残した遺産があるうちにこそ、日本の企業がこの地域に再度注目してみるのも意義があるように思われた。



(以上)

※：参考文献 日中合作—中国 No.1 ソフト企業誕生の物語 沓澤 虔太郎氏